



建築家・片倉隆幸が語る
これからの日本人と住まいの在り方

これからピーク・オイル時期になって、日本のエネルギーの使い方も変わってきます。例えばイギリスでは、トランジション・タウンと言って各地域でコミュニティを作り、みんなで自給自足をしていくにはどうしたらいいだろうという運動が以前から起こっています。日本でもそうしていかないとけないんですよね。各地域で地産地消を活かして、例えばもつと間伐材を利用して暖炉を使ったり。電気がなくては何もできないという状態ではまずいですし、もつとローテクな火を見つめ直すということも大事だと思います。今の子供達は、火の扱いを知らませんよね。薪を燃やして暖まるとか、その火の周りに集って絆を深めるなんていうことも到底知らないもつとみんなの集まる場所にそういう仕組みを作っていくべきだと思います。それは火の教育「火育」というか、素材を活かした教育というものをキチンとやっていかななくてはいけないなと感じています。



建築家・片倉隆幸が語る これからの日本人と住まいの在り方

～東日本大震災から考える～

今回の未曾有の災害は、大かれ少なかれ、すべての日本人の生き方に変化をもたらしている。

あるいは変革をもたらすものに違いありません。

これからのこれからの家、生活について、どう考えるべきなのか、住宅作家という立場から片倉隆幸氏がその道筋を示してくれました。



人間にとっての本来の姿とは何か？ 家とは、子供の教育とは？

今 回の東日本大震災に対しては、いろいろな方がいろいろなことをおっしゃっていますが、僕は人間の技術への過信ということが大きいのではないかと思っています。日本人は本当に美しい風景を犠牲にしてまで、耐震や耐火などの強固な構造物を作ってきましたが、それが今回の地震による津波でやられてしまった。そうすると、一人人間は何を目的にして建築物を残してきたかということがとても大きな問題です。

最 近、性能表示制度や長期優良住宅といったものがいろいろあります。あるいはオール電化が地球に優しいとか。でも、そういうキヤッチフレーズだけが浮いてしまつて、本質的に良い

家とはなんだろうという議論がなんにもなくなつてしまつています。そんなことよりも、もつと本質的な「人間にとっての本来の姿とは何か」という議論をもう一度ちゃんとやっておくべきでしょう。それも、どういうところでコストがかかるのか、かからないのか。それを突き詰めていくと、ローコストで家を作るということが本質的な意味で良い家を作るということにつながってくると思うんです。

先 日、毎日新聞に建築家のレンゾ・ピアノの発言が載っていました。彼が、彼は東日本大震災について「自然と科学、科学と人間の関係を変える大きな時代の転換点になる」と言っています。またレンゾは「私は、技術は信奉してい

るが、社会を脅かす技術は支持しない」とも述べています。イタリアのジェノバにある彼の事務所は、太陽光と室内の気流を使って温度調節をしているそうで、夏も冬もエアコンを使わないらしいんです。実は僕もそういう仕組みを作ろうと思つて努力していたところだったので、このレンゾの発言はとても励みになったんです。つまり太陽の光や気流をデザインするというのは、とても大事なことだと思つています。住宅会社も「太陽光を取り入れましょう」と盛んに言っていますが、でもそうすると「どこのメーカーのどういう製品がいい」という点で争つている。そういう問題ではなくて、自然のエネルギーをどのように利用していくか

建築は神から与えられたプロポジション

建 築のカタチというのは、アントニオ・ガウディやフランク・ロイド・ライトもそうでしたが、やはり自然から生まれてくると思うんです。緑の木々や湖があつて、動物達もいる、そういう生物圏での自然と家とのバランスがとても大事で、自然から教えられるカタチというのが基本的に建築にも取り込んではいけないと考えています。ああいう震災があつたとしても僕は自然の尊さを信じたくて、もつともつと自然の中にヒントを見つけていきたいなとも思っています。

ま た、一般化した、相対化した建築のデザインが市場で認められ

るということになれば、それが他にも使えますよね。そうした誰にでも受け入れられるデザインをきちんと造ることが必要で、それが質的にも優れていけば、どこでも出回っていく。ただ地域によって風土が違いますから、その土地をよく見つめることが大事だと思います。例えば太陽熱、地熱といったものはほとんど取り入れていかなければいけません。風力に関しては風が吹くところでないといけない意味がない。つまり地域の特性を見ながら、その素材を十分に活かしているということだと思つています。でも、何か売れる製品があると地域性が排除されてしまつて、そこにある本当に大切なものを失つてきた。

ほ とんどの地方がそうなんです。アットランダムに建築が出来て

いるから、自然の中での建築との相関関係が何にもないんです。美しいと思う建築は数少なく、一軒だけ美しいものがある。あつても全体として全然まともじゃない。そういうことに対して、もつともつと努力していかなければいけないと思つています。それは教育の問題でもあつて、小学校の授業で「国語、算数、理科、社会、建築」というようなことにならばいいと考えています。良い建築とは何なのか――安いでいいだけじゃなくて、もう少し文化的にきちんとした仕組みを持ったものなら、多少お金がかかっても良い建築だと分かるような素養が子供達に出来てくれば、大人になつて変なところでケチらないようになる。つまり、「根本は何が大切なのか」ということを教える教育を、ちゃんとやらないとダメだと思つています。これは建築だけの問題ではありませんよね。

そ うした教育をしていけば、建築のプロポジション（＝比率）というのは、神から与えられたプロポジション、自然が作り上げたプロポジションだということに気付くようになる。美しいものは何か、そうした考え方のトレーニングをしていかなければ、大人になつて変なものを作つてしまいます。ですから、これはすべての人の責任で、建築だけの責任ではない。より良い日本人になつていくためには、そうした根本からやっていかなければいけないと思つています。

左は、聞き手の「安くていい家をつくる会」事務局の(株)住宅経営 代表取締役社長 森下誉樹



自 然と一緒に暮らそうと言いながら、家自体は自然をシャットアウトしている。冬は寒いから暖かくしてくれ、夏は暑いから涼しくしてくれ、いつてぬくぬくと部屋の中にいるのでは、それは全然自然を感じない家じゃないですか。性能はいいかもしれませんが、でも僕の考え方からすると、昔の日本の家は寒かったけれど大きな開口部があって、自然がバンと見れた。今はそのおおらかさがないですね。もっと自然に優しく接しないといけないと思いますし、人間はそんなに技術に甘んじてなんでもできちゃうと思うのはやめた方がいい。もっと本当に大切なものは何かを考えなくてはいけないと思います。今は日本人の良さ、特質というか、日本人らしい生き方を復活していくことが、家づくりにとっても大事だと思いますし、それは家族でもそうだし地域でもそうだし、学校でも、政治もそう。そういうことをちゃんと突き詰めていかないと、絶対日本はよくなると思います。

建 築の素材は人体に影響を与えるものではないかということ、昔から盛んに言われています。けれどもこれからは、今まで粗末にされてきた素材をもっときちんと使っていくことが必要でしょう。多少隙間が空いていてもいいから、この木が本来持っている良さは何なのか、設計者も工務店もそうしたところを消費者と分かり合うようにしてい



かないといけないと思います。クロスがちょっとはがれて文句をいうお施主さんもありますが、そんな問題ではなくて、本質的にはもっと豊かなものがあると思う。総体としてその人に合った家だとしたら、それは最高のものではないでしょうか。

10年、15年経ったらまたその建築に価値を付加できるような、根本がしっかりしたものを造らなければいけないんです。もしも自分たちがその家を嫌になったら、中古住宅として売れば良い。そうして日本に良質な中古住宅が増えていけば、すごく豊かな国になると思うんです。資産価値を高めるといことが、どれだけ日本をよくしていくことか。古くなればなるほど良くなる家って、今はほとんどありませんよね。鉄骨の寿命は40年、コンクリートが50年と言われるけれど、木造はもっと長い寿命があるということを古い建築が教えてくれています。



で すからスクラップ&ビルドなんという考え方はやめて、ちゃんとした設計者がちゃんとした工務店と組んで、ちゃんとした家を作っていく。もし施主が10年で飽きて出て行ってもいいんです。その家にそのとき魅力があれば、購入してくれる人がいますから。そして購入した人たちがまた直す。そうすると、イギリスの街にあるような、厚みのある家になってくると思うんです。それは大きいとか小さいとか、ローコストとか金がかかっているという問題ではない。それは建築家個人の、生き方の問題だと思います。

家とは、そこに住まう人の人生観を 作り上げるようなもの

建 築家はどんな家でも作っていいというわけではなく、この建築を造ることによって大多数の人たちに、金銭やいろいろな面において膨大な犠牲を払わせることになる、そうした意味で自分が建築をやるのが本当に人のためになるかどうか、そういうことをよく考えなくてはいけないと思います。「この仕事をすれば金になる」と、そういう考えの人たちがいっぱいいると思うんですが、それではない。やはり自分がその土地に手を下すということが、どのくらい人を幸せにするかということがまずあるべきだし、そこ住まう家族にとって一番幸せなことは何かと考えることが大事。その構想の中で費用の問題が出てくる。だから最初から費用じゃないんですね。

つ まり大きさに言うと、人生観です。家を作るときに、僕ら建築家の仕事というのは、そこに住まう人の人生観を作り上げるようなもの。そこに参加するわけだから、建築家というのはものすごく尊い仕事だと思います。

そ してモノを創造していく、つまり家を作る過程というのは楽しいものであるべきです。僕も設計しているときはとても楽しいし、クライアントのみなさんも楽しいって言ってくださる。建築の現場もそうだと思うんです。そうしていかないと絶対に良いものは出来ない。

僕 は学生るとき、先生から「基準はない。基準は自ら作り出すものだ」ということを教えられました。この言葉は施主のみなさんにも励みを与えているような気がするんです。というの、みんな「コストはこのくらいですか」と言うんですが、僕は「いや、そんなこと言わずにやってみましょう」と言っています。ロスも多いんですけど、でも金がこれだけだから、これだけのアイデアしか出せないという程度の生き方だったら、切ないじゃないですか。やっぱりどんなことであろうと全身全霊をかけてモノを想像していくということが喜びに通じるし、人を幸せにしますよね。その中でのコストの共有だと思っています。

建築家・片倉隆幸が語る
これからの日本人と住まいの在り方

